

消化器内視鏡学

科目責任者：入 澤 篤 志 内科学（消化器）講座

I. 前 文

現在の消化器病診療（消化管診療，胆道・膵臓診療）において，消化器内視鏡は欠かせない診療機器です。多くの消化器疾患は，内視鏡を用いた診断を基に，適切な治療方針（内視鏡的治療，外科的治療，放射線化学療法など）を立案します。すなわち，消化器病学を学ぶにあたって，消化器内視鏡で得られる画像や内視鏡を用いた治療（論理と具体的手技）をしっかりと理解しておく必要があります。しかしながら，必修科目としての行う「消化器」の講義内では消化器内視鏡に特化した内容に十分な時間を取ることができません。

近年行われた全国の医学部学生を対象とした調査では，消化器内視鏡関連の画像は苦手分野の第一位との結果であったと伝え聞いています。本講座では，7回の講義を通して，消化器内視鏡を用いた診断と治療について，その基本から応用までわかりやすく解説します。系統講義として行う「消化器」の補講的な役割を担うとともに，消化器内視鏡画像に対する苦手意識を少しでも解消できるようなプログラムとなっています。

II. 受入可能人数

4年生から6年生まで，消化器内視鏡学を学びたい学生を広く歓迎しますが，本講座は実際の内視鏡機器に触れながらインタラクティブに講義を行うため，8名ほどの受け入れ人数とします。

III. 担当教員

科目責任者	入 澤 篤 志	内科学（消化器）	教授
担当教員	入 澤 篤 志	内科学（消化器）	教授
	郷 田 憲 一	内科学（消化器）	教授
	富 永 圭 一	内科学（消化器）	准教授
	星 恒 輝	内科学（消化器）	講師

IV. 学習内容

はじめに，現在用いられている消化器内視鏡に実際に触れていただき，消化器病診療における役割の概念を掴んでもらいます。その後は，各臓器診療における消化器内視鏡診断と治療について講義を行います。これらの講義は，実際の内視鏡機器ならびに内視鏡診療に使用するデバイス（処置具）に触れながらインタラクティブに行うことを基本とします。また，動画を多用して講義を進めますので，リアルに消化器内視鏡診療の実際を学ぶことができると考えます。

<授業計画>

- 第1回目：消化器内視鏡学総論（内視鏡や処置具の構造と役割）
- 第2回目：上部消化管（食道・胃・十二指腸）に対する消化器内視鏡診療（1）
- 第3回目：上部消化管（食道・胃・十二指腸）に対する消化器内視鏡診療（2）
- 第4回目：下部消化管（小腸・大腸）に対する消化器内視鏡診療（1）
- 第5回目：下部消化管（小腸・大腸）に対する消化器内視鏡診療（2）
- 第6回目：胆道・膵臓に対する消化器内視鏡診療（1）
- 第7回目：胆道・膵臓に対する消化器内視鏡診療（2）

V. 学修の到達目標

- 1. 必修科目である「消化器」の理解を深め，成績向上に繋げることができる。
- 2. 消化器内視鏡関連画像の苦手意識を解消できる。

VI. 成績評価の方法・基準

口頭試問等により評価します。全7回中、5回以上出席しないと評価の対象とはしません（単位を取得できないこととなります）。

VII. 使用する教材・資料など

教科書等は使用しません。必要に応じてプリントを配布します。

VIII. 質問への対応方法

基本的に質問は随時受け付けます。消化器内科医局（内線2726、平日9時から17時）に電話し、講義担当者のアポイントを取ってください。

IX. 求められる事前学習、事後学習*（ ）内は所要時間の目安

講義の中で、基本から応用までを理解していただくようにします。
事後学習として講義の内容をまとめてください。（30分程度）

X. 該当する医学教育モデルコアカリキュラム

C-2-2, C-3-1, C-4-5, C-4-6, D-7-1, D-7-2, D-7-3, D-7-4, E-2, E-3, E-4, F-1-1, F-1-2, F-1-3, F-1-4, F-1-5, F-1-20, F-1-21, F-1-22, F-1-23, F-1-24, F-1-25, F-1-26, F-2-1, F-2-2, F-2-3, F-2-4, F-2-5, F-2-5, F-2-7, F-2-12

XI. 課題に対するフィードバックの方法

本講義では特に課題等は課しませんが、口頭試問に関しては講義の中で随時フィードバックを行います。

XII. 卒業認定・学位自余の方針と該当授業科目の関連

*◎：最も重点を置くDP ○：重点を置くDP

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）		
医学知識	人体の構造と機能、種々の疾患の原因や病態などに関する正しい知識に基づいて臨床推論を行い、他者に説明することができる。	○
	種々の疾患の診断や治療、予防について原理や特徴を含めて理解し、他者に説明することができる。	◎
臨床能力	卒後臨床研修において求められる診療技能を身に付け、正しく実践することができる。	
	医療安全や感染防止に配慮した診療を実践することができる。	
プロフェッショナリズム	医師としての良識と倫理観を身に付け、患者やその家族に対して誠意と思いやりのある医療を実践することができる。	
	医師としてのコミュニケーション能力と協調性を身に付け、患者やその家族、あるいは他の医療従事者と適切な人間関係を構築することができる。	
能動的学修能力	医師としての内発的モチベーションに基づいて自己研鑽や生涯学修に努めることができる。	
	書籍や種々の資料、情報通信技術（ICT）などの利用法を理解し、自らの学修に活用することができる。	
リサーチ・マインド	最新の医学情報や医療技術に関心を持ち、専門的議論に参加することができる。	○
	自らも医学や医療の進歩に寄与しようとする意欲を持ち、実践することができる。	○

社 会 的 視 野	保健医療行政の動向や医師に対する社会ニーズを理解し、自らの行動に反映させることができる。	
	医学や医療をグローバルな視点で捉える国際性を身に付け、自らの行動に反映させることができる。	
人 間 性	医師に求められる幅広い教養を身に付け、他者との関係においてそれを活かすことができる。	
	多様な価値観に対応できる豊かな人間性を身に付け、他者との関係においてそれを活かすことができる。	